■安東盛　　南洋放浪の大衆作家。
あんどうさかん
郡司千島探検1893＝　　大分県白丹村(竹田市)で，農林業安東常太郎，クラの次男に生まれる。11人兄弟の4番目。
日清戦争始・1894＝ 1歳：

やんちゃに育ち，

教科書疑獄・1902＝ **9歳：**

日露戦争終・1905＝12歳：

写生に行った際，焚火がもとで山火事になり，警察沙汰になるなどして，
ｱﾗﾗｷﾞ創刊・ 1908＝15歳：久住小学校を卒業し，大分県立農学校に水産科入学。

大逆事件判決1911**＝18歳：**
明治天皇没・1912＝19歳：**_寄宿舎の壁に'海賊になる'と落書を残して，樺太に渡る。シベリア，中国を回り，**
大正政変・・1913＝20歳：この頃，一旦帰国して，**_台湾へ。**

21ヶ条要求・1915＝22歳：この頃，**_{台湾新聞社}に入社し，**
民本主義・・1916＝23歳：**_香港・アモイ方面を旅行，**
ロシア革命・1917＝24歳：朝鮮で働きに出る途中に台湾に立ち寄った兄茂へと新竹で会うが，
本格政党内閣1918＝25歳：朝鮮で流行性感冒に罹った兄茂に続き弟登まで死去。葬儀参列のため，大分に8年ぶりに帰郷，両親の嘆きの深さを思い知る。この頃，**_海賊調査に南支那へ向かい，首領とも知合う。**
ﾍﾞﾙｻｲﾕ条約・1919＝26歳：「亡き兄と弟へ」執筆。
大暴落・・・1920**＝27歳：**
原敬首相暗殺1921＝28歳：湯浅よねと**_結婚。仏領インドシナ旅行，からゆきさんを実体験，**
水平社結成・1922＝29歳：「亡き兄と弟へ」を併載した***処女作「南支那と印度支那」刊行後，{台湾新聞社退社}し，帰国。**
関東大震災・1923＝30歳：東洋協会の機関誌{東洋}に「黎明期の台湾」連載。
護憲三派圧勝1924＝31歳：伝説物語「晋陽宮」，時代小説「黒令嬢」発表。
治安維持法・1925＝32歳：父が死去し，家督を相続。{植民}に***からゆきさん取り上げた最初の作品「国境で別れた女」執筆。**
円本時代始・1926＝33歳：{台湾新聞社}の上司宮川次郎と{拓殖通信社}設立，{台湾・南支・南洋パンフレット}創刊するも，仲違し退く。平山蘆江引立てで，短編小説「あの人たち」，戯曲「迷える民族」発表，**_作家の道歩み始めるが，**
金融恐慌・・1927＝34歳：{女性}に掲載された**_久米正雄「安南の晩鐘」について，{東京朝日新聞}が安東が久米に掲載依頼した「黎明の鐘は鳴る」の盗作であると記事にし，文壇でも騒ぎになるなか，久米に抗議するも無名作家のためかなわず，逆にどこの雑誌社からも敬遠されてしまい，朝日記者の計らいで，村松梢風の支援を受け，**
共産党事件・1928＝35歳：***村松主宰の{騒人}舞台に，「波上の王者(南支那の海賊譚)」皮切りに，**
世界恐慌・・1929**＝36歳：**本籍を東京市麻布区笄町に移す。**_次々執筆，**
海軍軍縮条約1930＝37歳：**_{週刊朝日}にも執筆するようになるが，{騒人}は廃刊。村松の縁で{中央公論}ほか，**
満州事変・・1931＝38歳：**_{少年倶楽部}などに原稿持ち込み掲載される。海賊の首領と会うため，台湾経由で福建省アモイへ。**
五一五事件・1932＝39歳：麻布桜田町に転居。**_{女人芸術}に「海外に放浪する天草女」掲載，自ら原作の映画「飢えたる武士道」が製作され，{読売新聞}連載の「海賊王の懐に入る」に続き，からゆきさん描いた「祖国を招く人々」刊行後，懐も豊かになったこともあって，横浜を出航してカロリン諸島へ向かい，諸島回って最初の南洋旅行，**
国際連盟脱退1933＝40歳：**_帰国。「怪奇と夢幻の南洋」連載，「南十字星に祈る」刊行し，協議離婚後，再び南洋諸島を回る。帰国し，共同作詞の「カナカの娘」のレコードが発売後，満州へ。「南洋と裸人群」が風俗壊乱理由で一部削除処分。**
帝人疑獄事件1934＝41歳：母が死去。この年も，**_快調に次々著作。**
芥川直木賞始1935＝42歳：**_「世界を描く随筆五十人集」にも入るに至り，{夏の國冬の國社}設立し創刊するがすぐ挫折。台湾生蕃討伐隊員の放将不穏の行動を描いた「或る討伐隊員の手記」が発禁処分。サイパン島から諸島を回って帰国。**
二二六事件・1936＝43歳：倉橋ひさと**_再婚後，パラオから諸島を回って帰国。20年ぶりに帰郷。もっとも売れた「南洋記」はじめ，「セレベス島女風景」「海賊の南支那」，**
日中戦争始・1937＝44歳：**_「未開地」「支那のはらわた」刊行，{週刊アサヒグラフ}に「海賊記」連載して表紙を飾るなど，まさに絶頂期となるが，第5回目の南洋旅行に出かけて帰国後，体調不良となり入院，**
健保+総動員 1938**＝45歳：*{週刊朝日}が海外での気丈な女性綴った「異郷情話・女挺身隊物語」を掲載してまもなく，肺臓ジストマにより，自宅で没した。翌年，最後の著作「南海の業火」が刊行された。**

青木澄夫「放浪の作家安東盛と"からゆきさん"」，